

平成 22 年 6 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520198

研究課題名（和文） シェイクスピアの近代における受容に関する表象文化論的考察

研究課題名（英文） A Study on the Modern Reception of Shakespeare from the Viewpoint of Cultural Representations

研究代表者 高田 康成（TAKADA YASUNARI）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：10116056

研究成果の概要（和文）：

シェイクスピアとその研究は西欧近代の産物であり、「西洋中心主義」批判もまた同じ歴史的運動の産物である。従って、そのような批判言説の動向は、西欧近代文化に内在的な自己反省的な構造を明かす。その構造を分析的に捉えるために、世俗化、自然、差異という主題軸を設定し、それぞれに呼応する学問分野と宗教文化との関係において考察を行い、「近代化」（非西欧文化圏）におけるシェイクスピア受容の構造と特質を示した。

研究成果の概要（英文）：

Shakespeare's work and its study are both the products of the modern Europe, which has also produced the critical trend of "Eurocentrism." It follows that such trend is a manifestation of the structure of self-reflexivity intrinsic in the modern European culture. The present study is an attempt to clarify such structure through the analysis of Shakespeare's work, making use of the thematic problematics such as secularization, nature and difference, each of which has a corresponding discipline and a frame of reference to religious cultures. The analysis shows the peculiar nature and structure of Shakespeare's reception in the "modernized," i.e., non-Western cultural sphere.

交付決定額

（金額単位：円）

|         | 直接経費      | 間接経費      | 合計        |
|---------|-----------|-----------|-----------|
| 2007 年度 | 1,300,000 | 390,000   | 1,690,000 |
| 2008 年度 | 1,100,000 | 330,000   | 1,430,000 |
| 2009 年度 | 1,000,000 | 300,000   | 1,300,000 |
| 年度      |           |           |           |
| 年度      |           |           |           |
| 総計      | 3,400,000 | 1,020,000 | 4,420,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：シェイクスピア、近代、近代化、受容、西洋中心主義、世俗化、異文化

## 1. 研究開始当初の背景

シェイクスピアと近代との関係について、研究代表者は平成 18 年に論文を発表し--

“Shakespearean Distance,” *Shakespeare Studies*, XLIII (2005), 1-36 -- 以下のように論じた。(1) いわゆるポスト・コロニアリズ

ムに代表される「西洋中心主義」を批判する批評の立場が流行しているが、シェイクスピア研究と言われている学問的営為が本質的に「西洋中心主義」的であって当然であること、(2)しかしその「西洋中心主義」は、同時に「近代」という多岐にわたる運動と切り離すことができず、その一部であり、したがってその限りでは、「近代化」の影響下にある非西洋の文化にも本質的な意義を有すること、そして(3)その限りにおいては、非西洋の異文化においても、シェイクスピア作品とその研究に内在的な「近代」の諸問題が妥当すること。本研究は、上記のような基本的な立場に立って、シェイクスピアの作品と近代の問題をさらに追求しようとしたものである。

シェイクスピア研究はそもそも西洋一より厳密には西洋近代 — が生み出したものであり、いわゆる「西洋中心主義」批判の言説もまた西洋近代の産物である。我が国の西洋文化研究は、国の存亡をかけた「近代化」という一大事業の影響下から長らく脱却することができず、西洋における研究動向をいち早く導入することを繰り返してきたために、「西洋中心主義」批判の動向もまた西洋から無批判に輸入することに甘んじるという皮肉な結果となっている。ここで重要なのは、「西洋中心主義」批判の異文化における「批判的な」導入にある。すなわち非西洋文化圏で唯一「近代化」を成し遂げた異文化の国として、西欧近代が生み出したシェイクスピアを受容することは、「近代」という事態を反省的に捉えなおすことに通じるはずであり、またそうでなければならない。西欧近代が生み出し受容と変容を通して育ててきたシェイクスピア研究が、「近代化」を成し遂げた異文化の地においてどのような解釈の地平において受容されるのかが分析的に問われねばならない。これは単にシェイクスピアの作品が如何に翻案され上演されたかというような経験的な事実の問題として片付けられてはならず、根本的には認識論あるいは解釈学的な問題として設定されねばならない。本来、演劇は時代の認識論的臨界を垣間見させる装置であり、その意味では、近代化した日本におけるシェイクスピアという近代の産物の受容は、日本近代の臨界を問うものとなるはずのものであり、それを分析的に考察する必要があると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、シェイクスピアの作品の「近代」における受容の考察を通して、作品と後代の歴史が織り成す相互照射のありさまを顕在化させ、そのことによりシェイクスピアの詩的・演劇的構想と「近代」という歴史的運動の双方の特性と限界の概略と輪郭

を明らかにしようとするものである。その場合の「近代」とは、そもそも西欧が生み出したものではあるが、「近代化」過程という一種不可避の歴史的運動を伴い、非西洋文化圏にも波及し、さらにポスト・モダン(脱近代)と呼ばれる現象をももたらしている。とすれば、そのような非西洋文化におけるシェイクスピア受容の構造は如何なる形をとり、如何なる分析方法がありうるか、が問題となる。そのいわば「近代」の異文化受容の構造に関して、分析的にアプローチする道を示すことを本研究は目指すものである。

## 3. 研究の方法

研究が許された3年間において、年次を追ってそれぞれ(1)世俗化・合理化、(2)自然・循環、(3)差異・外部、といった「近代」を特徴づける主要な主題的軸にそって分析を進めた。それぞれの主要主題軸は、「近代」の問題群を自己投影する学問分野に関連し、具体的にはそれぞれ(1)社会科学(マックス・ヴェーバー)、(2)人類経済学(モース/バタイユ)、(3)文化人類学(レヴィ・ストロース)・脱構築(デリダ)などを学問分野的な枠組みとして援用した。例えば、『間違いの喜劇』における「ダブル」のモチーフを脱構築的「差異の原理」で見ると同時に、劇中に暗示される「世俗的価値空間」をヴェーバー的な「脱魔術化」の社会科学的な視座から分析する、あるいは『アテネのタイモン』や『リア王』に見られる「自然」の循環的持続の崩壊といったモチーフ「人類経済学」的視点から捉えなおす、というものである。上記3者の学問分野的枠組みに裏付けされた3つの主題は、援用される場合には、各々ばらばらにシェイクスピアの個別作品論のかたちで利用されることが多く、「近代」の受容の問題として総合的に考察されることはほとんどないと言ってよい。本研究は、シェイクスピアを生み出したところの歴史文化的諸力は、それを受容・再生産する歴史文化的地平と不即不離の関係にあり、両者あいまって一つの歴史文化的複合体(西洋近代)を形成するという立場に立つ。あるいは、そういう不即不離の関係に立たない限り、シェイクスピアを受容する意味が見出しがたいと言ってもよい。たとえば、儒教的な立場からシェイクスピアの作品をアジア化する試みは可能でありまた実際行われているが、そのような受容者側に徹底的に引き寄せた解釈と受容の在り方は、なぜシェイクスピアを対象として選択しなければならないのかという問いに答えることができない。「西洋中心主義」批判のアプローチも畢竟それと変わらない。本研究は、そのような認識に立って、「近代」と「近代化」を同一の歴史文化的複合体の事象として、そのなかでの「生産と受容」

の分節の在り方を批判的に分析しようとする。言い換えれば、「西洋中心主義」を流行に乗って無暗に批判するのではなく、逆にそれを徹底的に追認することにより、その限界と可能性に関して新たな光を当てようとした。

「近代的受容」の問題は、また異文化・異文明との接触（対立・同化・支配・従属）といった問題と無関係ではありえない。とりわけ深刻でもあり興味深い事態は、異なる宗教的基盤をもつ文化との接触であろう。本研究では、上記3つの主題に相関する3つの（「反近代的」）宗教文化を取り上げ、それぞれの近年におけるシェイクスピア受容を考察することを通じて、「西洋・西欧」の外部との関係を顕在化することを目指した。すなわち「西洋近代」の（1）世俗化・合理化の側面については、ユダヤ教的宗教文化における受容において、（2）自然・循環の側面については、仏教・儒教的宗教文化における受容において、（3）差異・外部の側面については、イスラーム教的宗教文化における受容において、それぞれ考察を行うことにより、シェイクスピア作品の生産と消費が繰り返されてきた「西洋近代文化」とその外部たる「異文化・異文明」との相関関係と差異を具体的に把握しようとした。

これを図解するならば以下のようなになる。

シェイクスピア作品の創出  
その主題的分節と受容・消費  
（西洋近代文化）

「近代的」主題的分節

- ① 世俗化・合理化
- ② 自然・循環
- ③ 差異・外部

「学問的」分節

- ① 社会科学
- ② 人類経済学
- ③ 文化人類学・  
脱構築

「反近代的」異文化基盤

- ① ユダヤ教
- ② 仏教・儒教
- ③ イスラーム教

#### 4. 研究成果

まずは「自然・循環」、「差異・外部」といった主題軸に沿って研究を進めた。（1）シェイクスピア研究に関しては、この主題に妥当すると当初考えていた作品、『アテネのタイモン』、『リア王』、『冬物語』を主な対象とするよりも、まずは『コリオレイナス』と『シ

ンペリン』を対象とするほうが効果的と判断した。その理由は、シェイクスピアの作品世界を「自然・循環」というテーマで見渡したとき、それに対抗する直線的な時間の形態として、2種類の「歴史」が問題として姿を現わすからである。2種類の「歴史」とは、すなわち、旧約・新約に基礎を持つ「救済史」と、異教的な「ローマ史」のそれである。前者にはシェイクスピアの所謂「英国歴史劇」が連なり、後者は同様に所謂「ローマ劇」に反映されている。そして、これら両者がシェイクスピアの作品世界で交差するとすれば、それは『シンペリン』である可能性が高い、というのが目下の結論である。さて、「自然・循環」という主題が社会あるいは政体的な次元において展開された場合、それを最も典型的に体現するのは、『コリオレイナス』中に提示されている腹中心的「政体論」である。この有名な寓意は、ローマの共和政という専制君主＝頭を排除した独特の政体論となっていて、頭の代わりに政体全体を統括するのは「腹＝元老院」とされる。すなわち、「腹」という生物にベーシックな栄養源を作り出す器官を中心的統括者とすることにより、政体＝ボディ・ポリティックの問題をまさに「自然・循環」の問題に還元してしまおうとする。とはいえ、「救済史」はもとより、「ローマ史」といえども、「自然・循環」の問題に還元されてしまうことはない。『コリオレイナス』の主人公コリオレイナスは、「自然・循環」からなる「腹的政体論」を理念なき、下等な思想と軽蔑し、果てはそれを捨て去ることに及ぶが、その精神的な希求は、たしかに肉体（政体）という基盤を無視する不遜な行為ではあるが、同時に「ローマ史」をかたちづくる共和政理念の根本にある「浄化」の理想と希求を実際に遂行することもまた確かである。すなわち、「ローマ史」は「自然・循環」を超越する或る理念・志向性の存在に支えられているのである。われわれはその志向性をヴァレーリアという特異な登場人物に見る。しかし、重要なことに、この「自然・循環」の外に立つ志向性は、「救済史」を支える「啓示」ではない。『シンペリン』では、この「自然・循環」を超える志向性は、ジュピターの降臨という形で現れるが、これも救済史に言う「啓示」ではない。（2）「近代」の学問的言説に関する考察については、我が国の「近代」の総決算を企て見事失敗した「近代の超克」にまつわる諸問題を比較近代論的に考察した。総じて、我が国の「近代化＝西洋化」の言説では、「自然・純粋的日本VS外来・不純的西洋」という二項対立的意味作用が効果を発揮することがしばしばであり、「和魂洋才」といってもこれを根本的に越えるものではなかった。これを表象作用の構造分析をするならば、「循環」と言うことがで

き、特に「他者」という、二項を越える絶対的視点を本質的に備える表象構造と対比するとき、その相対的「循環」構造は顕著である。そして、西洋近代は、根本的に「他者」的表象構造から成る。(3) シェイクスピアの異文化受容の問題に関しては、現地に赴き、エジプトにおけるその概要を得た。

「差異・外部」といった主題軸については、『コリオレイナス』と『オセロ』を主な分析対象として考察を進め、「主体と言説」、「反復と再生」、「身体と超越」といったテーマを中心に読解を試みた。「近代」に関する学問的言説については、特にヘーゲルの歴史哲学を歴史の終焉として読み解いたアレクザンデル・コジェーヴについて専門家の知的供与を得た。「近代」の問題系が、特定の理念(たとえば「自由」「平等」「進歩」との関係における歴史的展開であるとするならば、そのような弁証法的展開における矛盾と転轍を『オセロ』は示す。自由な都市国家ヴェネツィアにおいても、人種・民族を超える愛と結婚の実現は不可能であった。あるいはまた、ローマという政体の再生における「徳力」と「自然」の根本的な矛盾を『コリオレイナス』は雄弁に物語る。政体を維持するには(コリオレイナスに生得的に備わる)「徳力」が不可欠であるが、もしその「徳力」がその基盤である母体(民衆という自然)を無視するならば、すべてが崩壊せざるを得ない。政体は、その基盤が自然にあることを再認識しなければならないが、同時に政体は単なる自然だけではなく歴史的展開であるからには、自然を超える政治的原理が認識されなければならない。すなわち自然的再生という内的時間(テンポあるいはリズム)ではなく、歴史的完成(エンド)へ向けての進展という外的(超越的)時間の契機が存在しなければならない。コリオレイナスの悲劇は、内的時間の反省的な認識が薄弱なうえに、後者の外的契機の超越性が十分でなかったことによる。どこかで、外的契機の超越性(すなわち「差異・外部」ということになれば、ユダヤ教・キリスト教の神ほど超越的なものは見出しがたい。この問題を明確化するために、本研究では、イスラーム圏におけるシェイクスピア受容について、その専門家を招いて討議を行った。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

① TAKADA, YASUNARI, On “Overcoming Modernity”, *Journal of Japanese Studies*, 査読有 vol. 35, no. 2, 380-385

② 高田康成, What Is A Classic?の効用, *T. S. Eliot Review*, 査読有, 18 巻, 2007, 1-12

③ 高田康成, 『オーラートル』の理想と残影、言語、査読なし、3月号、2007、32-35

[学会発表] (計8件)

① TAKADA, YASUNARI, The Culture of “Here-Now”: Its Dilemmas and Potentialities, University of Colorado at Boulder, 17 November 2009

② TAKADA, YASUNARI, Circular Referral and Alterity: The Three Roman Ladies in Coriolanus and What They Tell Us Today, Center for British and Irish Studies, University of Colorado at Boulder, 17 November, 2009

③ TAKADA, YASUNARI, Shakespeare’s Rome: A Pagan Perspective, Symposium “Manichean Vision”, University of Sousse, Tunisia, 17 April 2009

④ 高田康成, Tertium Quid: メディアとしての西欧中世、日本西洋中世学会設立準備会、慶応大学、2008年10月25日

⑤ TAKADA, YASUNARI, History and Nationalism: A Very Limited Comparative Perspective, Symposium “Popular Memory and the Foundation of Identities, Lebanese American University, Beirut, Lebanon, 13 March 2008

[図書] (計4件)

① 高田康成, 名古屋大学出版会、『クリティカル・モーメント — 批評の根源と臨界の認識』、2010、460

② TAKADA, YASUNARI, Oxford University Press, *Classics and National Cultures*, 2010, 285-301.

③ 高田康成, 中央公論新社、『哲学の歴史』4、2007、362-387

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

高田 康成 (TAKADA, YASUNARI)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号: 10116056